

## 21 世紀に向けての日本光学会

岩 田 耕 一

(大阪府立大学)

日本光学会の前身である光学懇話会が発足したのは、1952 年であった。この時代の光学機器としては、カメラ、顕微鏡などが主なものであったと思われる。しかし、1960 年には初めてレーザーが発振し、まもなくきれいなホログラフィーの像が発表された。1970 年には光通信のシステムの構成が決まり、次いで、光ディスクが発表され、光の技術が世に広がることになった。また、リソグラフィ、液晶ディスプレイ、レーザー加工など、光学に関連した技術も数多く出現し発展してきた。日本光学会の歴史は光技術の台頭の歴史と重なっているといっても過言ではない。

1989 年に日本光学会として発足してから、歴代幹事長をはじめ多くの会員の努力により、本学会は順調に発展してきている。講演会や講習会、会誌「光学」などを通じての成果の交流が着実に行われるようになり、欧文誌「Optical Review」も次第に評価を高めつつある。学会の経済状況もしっかりしたものになってきた。このように、学会としての基盤は整ってきている。これからは、この基盤を生かして、そのカバーする範囲を広げることが必要になってくる。

第一は、専門の広がりである。日本光学会は、光学という分野については日本で唯一の学会である。しかし、光技術が広まるにつれ、従来の光学の範囲に収まりきれない分野が出現し、ますます広がろうとしている。物理、化学、情報、通信、計測、生産、環境、医学、生物などあらゆる分野が関連する。日本光学会は、自らの専門性を基礎にしながらか、このような関連の分野や学会と連携を密にし、自らを広げていく必要がある。

第二は、地域的な広がりである。日本物理学会と応用物理学会の他の欧文誌とともに、「Optical Review」の電子情報化の動きが進んでいる。この機会をうまく捉え、このチャンネルを通じて、独自の発想を世界に向けて発信するとともに、アジアをはじめとする世界の光学研究者の発表の場とすることが必要であろう。また、国際会議の開催によって国際交流の場を設けることも重要である。

第三は、会員の広がりである。新しい発想に基づく光学技術を生みだし、それを実社会に役立つものとするまでには、多くの段階の研究、開発がある。この各段階の間の情報交換と協力が必要となる。この意味で、さまざまなバックグラウンドをもつ会員を迎え入れられる土壌と魅力的な雰囲気作りとともに、会員を増やすための努力が必要である。

会員の中で、学会を盛り上げようという機運が生まれてきている。「光の世紀」ともいわれる 21 世紀の光関係の科学と技術に、日本光学会が大きく貢献できるようになりたいものである。